



「羽島郡二町立志塾」の取組について

羽島郡二町教育委員会



1 はじめに

羽島郡二町教育委員会では、平成26年度より「羽島郡二町立志塾」を実施しています。事業の目的は次の通りです。

- 学校のリーダーが、更に「高い『志』」をもち、仲間と積極的に関わり、自ら考え、判断し、行動できる」真に自立した岐南町・笠松町のリーダーとなるよう、資質向上研修を行う。
- 地域の活動に関心をもち、地域においてもリーダーシップを発揮し、子供主体の活動になるための企画・運営に積極的に貢献できる研修を行う。

事業開始当初は、秋季休業期間に3泊4日の短期集団合宿の資質向上研修*1を経て、後期の学校や地域での活動を推進していました。そして、コロナ禍の2年の休止期間を経て、令和4年度より、現在に続く分散開催型の研修事業へと変えていきました。

こうした事業により、急速に変化し先行き不透明な未来社会において、学校をリードしていく児童生徒の育成を継続的に図り、共通の目的のために、お互いに知恵を出し合い、責任ある決断と行動がとれる「意志あるリーダー」を育てています。

2 実施組織及び参加者

(1) 活動組織

- ① 主催 羽島郡二町「立志塾」実行委員会
- ② 実行委員会
 - ・ 塾長 教育長職務代理者
 - ・ 実行委員 教育長、学識経験者、総務課長、社会教育課長、学校教育課長、主幹
 - ・ 運営委員 教育委員会職員（総務課、社会教育課、学校教育課）
 - ・ 指導助言 教育委員
- ③ 講師（今日的な課題に対する講師*2、リーダーの資質向上の講師*3、立志塾OB）

(2) 参加者

- ・ 児童会・生徒会執行部等で活動したいと願う意志ある児童生徒
※ 毎年5月から6月にかけて羽島郡内全小中学校から32名程度を募集する。

3 活動内容

(1) 研修会1日目

- ① 日時 令和6年7月29日(月) 13:30~16:30
- ② 会場 岐南町中央公民館 講堂
- ③ 研修内容
 - (ア) 羽島郡二町「立志塾」の研修目的・内容を理解する。
 - (イ) 立志塾塾長・教育長の話聞き、研修目的を考える。
 - (ウ) 岐阜県教育委員会 義務教育総括監 青木 孝憲 様の講話
 - (エ) 高山研修に向けて説明を聞き、研修の目的を知る。



*1 乗鞍青少年交流の家をベースに、文部科学省職員による講話、外部講師によるワークショップ、テーマ別討論会、高山市内小中学校との交流、ミュージカルへの参加などの多彩なプログラムが組まれていた。

*2 令和4年度講師は、NPO法人岐阜立志教育支援プロジェクト理事 井上 武 様
令和5年度講師は、社会政策課題研究所 所長 江崎 禎英 様
令和6年度講師は、岐阜県教育委員会 義務教育総括監 青木 孝憲 様

*3 平成26年度より講師は、飛騨・世界生活文化センター 統括 六角 裕治 様

④ 児童生徒の振り返り

- ・僕は、西小学校では「ボランティア活動」、北小学校では「あいさつ」「教え合い」が学校自慢であることが分かりました。東小には、スマイル活動があるので、さらに他の学校のよさも取り入れられるようにがんばります。
- ・私は「話しかけられやすいリーダー」になりたい。組織にはがんばるリーダーとともに、支えてくれる仲間が必要です。私は「これしかない」と決めつけず、「相談されるリーダー」「仲間の意見を取り入れられるリーダー」を目指します。

(2) 研修会 2 日目

- ① 日 時 令和6年8月7日(水) 7:00~18:00
- ② 会 場 飛騨・世界文化センター 高山市内
- ③ 研修内容
(ア)飛騨・世界文化センター 六角 裕治 様 講話
(イ)高山市内グループ研修
- ④ 児童生徒の振り返り



- ・講話を聞いて、リーダーが大切にすべきことで、新しい視点がたくさんあった。「差別はしない。でも、区別は必要である。」「好きなことをするときばかり、リーダーになってはダメ。」は大切なことです。そういう視点を持って生徒会を動かせるリーダーになっていきたいです。
- ・発表には、どのような準備をするのかを具体的に教えてもらいました。しっかりした調査分析をすることで、説得力のある発表ができるようになりたいです。

(3) 研修会 3 日目

- ① 日 時 令和6年10月9日(水) 13:30~16:30
- ② 会 場 岐南町中央公民館 講堂
- ③ 研修内容
一般社団法人ココラボ代表理事 伊藤 大貴 様 をファシリテーターに招き「よりよい学校生活にするために何ができるか」をテーマにしたグループ討議
- ④ 児童生徒の振り返り



- ・学校ごとで、どんなことが課題なのか、どうやって解決しようとしているかを交流できました。自分の学校では、このことを参考にして、掃除の取組をしていきたいです。
- ・「自ら動く」「協働」ができる活動として、地域活動に取り組みます。地域の方たちと意見を交わし、社会のためという意識をもてる学校・生徒会にしていきたいです。

⑤ 各学校での継続的な取組

第2回研修会～第4回研修会の12月27日(金)まで、羽島郡二町教育委員会の主事がそれぞれの学校を担当し、学校改善プランを練り上げるために、定期的に進捗状況を塾生と相談する連携会議(対面・オンライン併用)を実施しています。

(4) 研修会 4 日目

- ① 日 時 令和6年12月27日(金) 9:30~12:00
- ② 会 場 岐南町中央公民館 講堂
- ③ 研修内容
岐南町長・笠松町長を招待し、各校の学校改善の取組・成果を発表し、講評をいただく。

4 今後に向けて

この事業によって、各学校の意志あるリーダーが集うことができ、そのリーダーたちはよい意味での刺激を感じている。また、そのリーダーたちが主体となって自発的・自治的な活動が各学校で活性化されると、子供の意見がよい方向に取り入れられる学校風土が醸成されることが期待される。

今後も研修会と連携会議をさらに充実させることで、児童会・生徒会活動が一層機能し、リーダーとともに羽島郡二町の全児童生徒にも人としての豊がさが育まれるよう、働きかけていきたい。

園小連携の取組について

1 はじめに

本町は、養老山では四季折々の美しさを味わうことができ、菊水泉で知られている美味しい水が豊富にある自然豊かな地であります。県営の養老公園には、天命反転地や養老の滝・子どもの国があり、桜のシーズンには、多くの人々で賑わっています。史跡や文化財では、象鼻山古墳群や薩摩義士役館跡、高田祭りなどがあります。

また、今年(2024年)は、町制施行70周年を迎え、本町が今後も発展し続けるために、養老の未来を担う若い世代や子どもたちが「養老で暮らす楽しさ」や「養老の明るい未来」を感じられるような事業を多く開催しました。11月には、「養老こどもまんなか宣言」を実施しました。

さて、今回は、平成13年に「幼小連携」として始まった園小連携の活動について紹介します。この活動は、子どもたちの健やかな成長を願い、園と学校をつなぐ取組で、今年で24年目となりました。



2 「養老町教育大綱」の基本方針

本町の教育は、人権教育をすべての教育活動の基盤として取り組んでいます。人を人として尊び大切に作る社会は、そこで生活するすべての人の幸せにつながります。保育園・こども園小中学校や地域社会すべてにおいて、人権を尊重する教育を充実させることで、「養老町まちづくりビジョン」に掲げる「人があつまり 楽しく生きがいのあるまち」の実現につながると考えています。また、保育園・こども園と小学校、小学校と中学校が連携し、乳幼児から児童生徒に至る発達の段階をつなぐ取組も本町教育の特色です。教育大綱の基本方針2には、『「未来に向かう力」を育む質の高い教育の推進 (5) 乳幼児期の充実と保育園・こども園と小学校の円滑な接続』があります。そのために、小1プロブレムのない教育を推進すべく、園小連携に取り組んでいます。

3 園小連携 研究内容

- (1) 自立し、生活を豊かにしていくための資質・能力
- (2) 園児・児童双方に実りのある交流活動の工夫
- (3) 小学校へのなめらかな接続を図る職員の連携の在り方
- (4) 幼児期、児童期の教育に関する理解を深めるための家庭との連携の工夫

本町の園小連携研究は県が進める「ぎふっこ」すこやかプランで示されている3つの基本目標を達成するために重点的に取り組む10項目の内容を網羅した研究内容となっています。

4 研究内容1に関わって

園児や児童の実態を「育っていると考えられる姿・資質・能力」と「育てていきたい姿・資質・能力」を明確にし、園児・児童に共通した課題点をはっきりさせ、それを土台として指導計画

を立てます。しっかり実態を捉えることで、目指す園児や児童の姿が明確になり、指導する上でもどう手だてを打てばよいか指導の具体策もイメージしやすくなります。交流が点で終わらず、園児・児童それぞれの「思いやねがい」が交流活動を通して少しずつ実現していき、段階的に「思いやねがい」が高まっていくよう意図的に仕組みます。これは、生活科の学習指導の特質でもあります。

5 研究内容2に関わって

行事的な交流活動の先の、日常的な交流活動を行っています。このことは、園児が不安感なく、円滑に小学校へ接続できる環境づくりとなります。園児、児童のめざす姿を育てるためにも日常的なつながりを積極的に仕組むことで、人との関わりの経験を積ませ、「たくさんの人と関わるって楽しいな」という思いを培うことに有効であり、職員により深い子ども理解につながっています。



6 研究内容3に関わって

園小の共同会議を通して、明確な見通しの観点をもとに、子どもの実態に応じて接続期カリキュラムの見直しを行います。それが実現できるのは、職員間で園参観や授業参観が日常的に行い、園小の教育内容の相互理解が大切です。園での子どもの育ちや小学校での子どもの育ちが理解することで、小学校への円滑な「子どもの育ち」の継続を図ることができます。

7 研究内容4に関わって

通信やホームページ、ドキュメンテーションにより、園や学校の活動を発信しています。このように、保護者や地域に広く園小交流の活動の「見える化」を強化していくことが、その価値を理解して、協力してくれる保護者や地域による応援団を形成していくこととなります。これは、園や小学校の魅力の発信や学校地域協働活動の推進にもつながります。



8 今後に向けて

さらに園・学校の特色を生かし、子ども同士・教職員同士がつながる方法を考え、実施し、学びあっていければと考えています。これからも、子どもたちの豊かな育ちにつながるようにしていければと考えています。

住んでよかった・誇れる町をめざして

～小・中学生を対象とした「ふるさとふれあい学習」の取組を通して～

関ヶ原町教育委員会 教育課

1 はじめに

わたしたちのふるさと関ヶ原は、東西文化の接点にある地理的・歴史的な要所で、風土豊かな町です。

わたしたちはこの町に生きる幸せを感謝し、先人の気概を今によみがえらせ、活気ある希望にみちた町づくりを願い、この憲章を定めます。

- 美しい自然を護り、誇りある歴史と伝統を大切にします。
- ふれ合いを大切にし、思いやりの輪を広げます。
- 教養を高め、豊かな環境とかおり高い文化の創造に努めます。
- 心身を鍛え、生きがいある人生を築きます。
- ふるさとを受け継ぐすこやかな青少年の育成を目ざします。



わがまち「関ヶ原」の町民憲章です。ここで謳われているとおり、本町は、岐阜県の西端に位置するまちで、町域の8割が山林と豊かな自然に囲まれたまちです。古来より交通の要衝であり、交通の便のよいまちでもあります。一方、少子高齢化、人口減少の進行は著しく、大きな課題となっています。

2 小・中学生を対象とした「ふるさとふれあい学習」の充実を

本町教育委員会では、「関ヶ原町民憲章」をもとにした生涯学習講座を展開しています。なかでも、憲章のしめくりにある「ふるさとを受け継ぐすこやかな青少年の育成を目ざします。」を受け、小・中学生を対象とした体験学習やスポーツ、アートなどの学習の機会を充実するようにしています。

ここでは、関ヶ原ならではの、コンパクトサイズの関ヶ原だからこそできる3つの講座「青少年ふるさと歴史探検講座」「わくわくチャレンジせきがはら」「子ども体験教室」を紹介します。

(1) 「青少年ふるさと歴史探検講座（全8回）」 対象：小学4～6年生、中学生

① 趣旨

- ・関ヶ原の歴史を楽しく学習し、紹介することでやりがいや達成感を得るとともに他学年との交流を深める。
- ・町内外の歴史的遺産について学び、歴史を学ぶ意義や楽しさを知るとともに歴史の知識や考える力を付ける。



② 主な内容

ア. 「踏破隊」史跡ガイド体験

毎年8月に鹿児島県日置市から「関ヶ原戦跡踏破隊（10名ほどの小・中学生）」が本町を訪れます。この踏破隊の隊員に関ヶ原合戦の陣跡等を案内します。

ガイドをするにあたり、事前に「現地学習会」を行い、学習会で学んだことをまとめ、説明する文章を考えました。中には、クイズ形式にする児童生徒もいます。最後に「ガイド案内」です。踏破隊員の小・中学生と直接ふれ合いながら案内しました。「よく勉強している。」「楽しかった。」などと毎年大変好評をいただいています。

イ. 「不破関ってなんだ？」～不破関 発掘調査の見学と体験～

本町には、古代三関のひとつである「不破関跡」があります。今年度は、不破関跡地で発掘調査が行われたこともあり、講座に参加する小・中学生が発掘調査を体験する機会を設定しま

した。調査を進める大学の先生から説明を聞き、子どもたちはペアになり建物の柱を埋めた穴を発掘する作業に取り組みました。補助をする学生にアドバイスを受けながら、「黄色の土が見えた」「石しか出てこない」などと声を上げながらスコップで地面を掘りました。ふるさとの史跡をくわしく知る機会となるとともに、普段できない貴重な体験をする機会となりました。



(2) 「わくわくチャレンジせきがはら (全5回)」 対象：小学生

① 趣旨 「体験を通して、心も体もたくましく」

- ・土曜日や長期休暇を生かして、普段体験することのできない自然体験や生活体験活動を充実させることを目的とする。
- ・歴史と自然に恵まれたふるさと「せきがはら」をよく知り、自然観察、創作活動などを楽しく行う。



② 主な内容

回	期 日	時 間	学 習 内 容	会 場
1	6/29(土)	9:30~11:30	ちーオシスタチュー(和紙の色付け体験)	ふれあいセンター
2	8/ 3(土)	9:30~13:30	クラフト教室	関ヶ原製作所
3	8/25 (日)	9:30~11:30	座れるベンチをつくろう	旧今須小中学校
4	11/ 2(土)	18:30~20:30	星空観察会	ふれあいセンター
5	12/15(日)	9:30~11:30	3Dカードづくり	ふれあいセンター

関ヶ原町今須地区は、豊かな森林資源に囲まれたもともと林業が盛んな土地で、管理が行き届いた今須の杉はゆっくり育ち年輪がきれいで、節も少ないことから「今須杉」というブランド杉として知られています。第3回講座では、地元の方や地元在住の技術家庭科教員OB（元校長）にご協力・ご指導をいただき、「今須杉」を材料にしたベンチ3脚を共同制作。そして、個人で手造りスマホ台を制作しました。



制作したベンチは、ふれあいセンターに設置し、町民の方に利用していただいています。

(3) 子ども体験教室「青少年生涯学習巡り」 2部制：小1～4年生の部、小5・6年生の部

① 趣旨

- ・夏休みを利用して、県内外にある生涯施設で体験学習をする。

② 主な内容

- ・小1～4年生の部では、京都方面に向かい、午前は京都鉄道博物館を訪れ、SLから新幹線までさまざまな展示車両を見学しました。午後は信楽陶苑たぬき村にて、湯飲みの絵付け体験を行いました。焼き上がりを想像し、思い思いの絵を描いていました。
- ・5、6年生の部では名古屋方面に向かいました。午前は中部国際空港セントレアを訪れ、グループに分かれて行動し、飛行機や飛行場などを見学しました。午後からはめんたいパーク・えびせんの里を訪れ、普段自分たちが食べている身近な食べ物がどのように作られているのか見学しました。
- ・参加した児童は、それぞれの場所でさまざまなことを学び、体験し、夏休みのよき思い出となりました。



グローバル人材の育成

輪之内町教育委員会 教育課

1 はじめに

学術、文化、経済をはじめ、様々な分野でグローバル化が進展している中、これからの時代を生きる子どもたちには、自己を確立しつつ、他者を受容し、多様な価値観をもつ人々と協働しながら課題を解決する力が求められます。また、多くの外国の人々と交流する機会が増えていく中、自ら進んでコミュニケーションを図ろうとする態度や豊かな国際感覚を醸成する必要があります。輪之内町では、輪之内町教育振興基本計画の重点施策に「グローバル化への対応」を掲げ、グローバル人材の育成に取り組んでいます。その一端を紹介します。

2 実践

(1) 英語検定受験料の全額補助

輪之内町では、平成29年度より小中学生の英語検定受験料を年1回、全額補助し、自分の英語力や目標に合わせて適切な級を目指すことで、英語学習を進める励みとしています。英検3級相当以上の英語力をもつ中学3年生の割合はまだ全国平均並ですが、2級や準2級にも積極的に挑戦し合格する中学生が増えてきました。

(2) 「イングリッシュデー」の実施

普段なかなか知る機会のないカナダ、アメリカ、フィリピン等、世界のさまざまな国について、その国の出身のALTだからこそ伝えられるリアルで深い情報を提供し、興味関心と英語でのやりとりへの意欲を引き出すことを目指し、中学校2年生を対象に「イングリッシュデー」を開催（各学級2時間×年2回）しています。



① ねらい

- ・第1回：ALTとの即興でのやりとりを通して 「イングリッシュデー」：小グループ毎に一人のALTして、英語での聞く力・話す力を伸ばし、カナダを含むさまざまな国と日本、輪之内町、生徒自身との共通点や違いを見つける中で世界を広い視野で捉える力を育む。
- ・第2回：生徒自身の選んだテーマで、自分の想いや考えを伝えるための英語表現、相手意識をもった伝え方を学ぶことを通して、ALTを含むグループで協働して1つのプレゼンテーションを作り、やり遂げることで自信につなげる。

② 2023年度実績：95.6%の生徒が楽しいと回答

- ・自分は英語を話すことが苦手だけれど、ALTの話をしっかりと聞いて、プレゼンをすることができました。また、外国の人たちとかかわることができて楽しかったです。
- ・貴重な体験ができて楽しかったです。もっとその国のことを知りたいと思いました。

- ・こういった機会を中学生のうちに経験しておくことにより国際的な考え方をもち人が多くなるかなと思いました。このまま続けて輪之内中の恒例例年行事となることを期待しています。今回のような機会を与えてくださってありがとうございます。
- ・初めていろいろな国のALTと交流することができてうれしかったです。とても楽しかったです。またやりたいです。
- ・あまり話せなかったけれど、初めて海外の人と交流することができて楽しかったです。
- ・ここ最近、学校のALT以外で外国の方と話す場面はなかったので、六か国ほどの国の紹介をすることができてとても貴重な体験ができました。

(3) 日本語教室に来ている外国人や地域在住の外国人との交流



「にほんごひろば」ブースでの外国人との交流

「にほんごひろば」(日本語教室)では、今年度はじめて「わのうち中学生未来塾」とコラボして、JICA、岐阜県警も協力のもと、「わのうちふれあいフェスタ2024」において、「にほんごひろば」に来ている外国人や地域在住の外国人と交流できるブースを設けました。テントの中では、キーホルダーづくりコーナーやおはなし広場を設け、外国のお菓子を食べながらゆっくりと会話を

楽しみました。また、児童センター前の広場では、「ダーカウ」という羽を蹴って遊ぶベトナムの遊びの体験も行いました。中学生が企画から運営まで、積極的に関わりました。

(4)「コリアンデー」の実施

韓国人の障がい者で構成された演奏団「DCUクリアサウンド・ハーモニカアンサンブル」をお招きし、輪之内中学校の生徒と交流をしました。中学生が韓国の民族衣装「チマチョゴリ」を着て司会進行を務め、韓国について調べたことをプレゼンで発表したり、演奏団によるハーモニカ演奏を鑑賞したりしました。



中学生が「チマチョゴリ」を着て司会進行

今年初めての試みでしたが大変好評で、来年度以降も何らかの形で交流を続けたいという声が聞かれました。

3 おわりに

これらの実践から、語学力やコミュニケーション能力だけではなく、主体性や協調性、異文化理解といった幅広い能力が身に付きつつあります。今後も単に語学が堪能であるだけではなく、異なる文化や価値観の中で柔軟に行動し、グローバルに活躍できる人材の育成に向けて取り組んでいきたいと思ひます。

「いびがわ木育プログラム 2024」の取組

～ 清流と森林に育まれたふるさとの豊かな文化をつなぐ ～

揖斐川町教育委員会 社会教育課

1 はじめに

揖斐川町は、人口1万8千人、西は滋賀県、北は福井県と接する県境の町である。町の中心部を木曾三川の一つ揖斐川が流れ、広大な面積803km²の約91%を森林が占めている。水と森林の恵を受け、日本一の貯水量を誇る「徳山ダム」を有するとともに、薬草文化や子供歌舞伎、伝承踊りを受け継ぐなど、歴史と文化が息づいている町でもある。

地域の教育資源でもある清流「揖斐川」と森林を学校教育や生涯学習に活かす取組みの一つとして、「いびがわ木育プログラム」を実践してきた。本プログラムでは、将来の地域社会を担う子供たちが森林と人をつなぐ体験的な活動（ふれるーあそぶーしらべるーやってみる）を通して、ふるさとの自然や文化を学び、愛着を深めることを主な目的としている。

2 プログラムの概要

<期待する効果>		
◎ プログラムの活動を通して、身近な森林環境への興味・関心を深める中で、地域の豊かな自然への理解と守り、育てることへの意欲及び態度が育つ。		
ジュニア森林マイスター養成講座	小学生森林マイスター養成講座	高校生木育体験講座
<対象> 小学校1～3年生/年5回 ① 初夏の山道散策（「創造の森」） ② くるみペンダントづくり ③ 森の学習と木の実クラフト ④ 木の実でChristmasリースづくり ⑤ 組み木細工（本棚）づくり	<対象> 小学校4～6年生/年5回 ① 町内の大木の幹の太さ調べ ② 揖斐川上流での森林探検活動 ③ 北方神社の森での木の高さ調べ ④ プロに学ぶロープワーク体験 ⑤ 植栽林の間伐体験	「森のようちえん」 保育体験活動 <対象> 県立揖斐高校 生活デザイン科 （保育コース） 生徒8人/年1回
関連する活動	「実のなる木」苗木のホームステイ・植樹活動	みどりの少年団（北方小）
	「生命の水と森の活動センター」（水と森の学習館） NPO 法人「揖斐自然環境レンジャー」	北方小学校みどりの少年団/4年生 （公益社団法人「岐阜県緑化推進機構」）
	<ul style="list-style-type: none"> ・平成21年度から始まった活動で、町内の全小学校と1中学校が参加している。 ・揖斐川水源地域の自然環境を守り、育てるため種から育てた「実のなる木」を町内の各小学校で育て、揖斐川上流域に植樹する。 ・4月以降、間伐材で制作したプランターで、ブナ、コナラ、ミズナラ、クリ、オニグルミの小苗をプランターで育苗する。 ・10月以降、小学生が育てた苗木を徳山ダム湖のコア山（コア採取場）に植樹する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・苗木を育て委嘱する活動、森と水、生き物とのつながりを知る活動を設定する。 ・令和6年度は、「つなぐ」をキーワードに苗木の育成から緑化までの長期的な活動を継続して行い、間伐や枝打ち体験を通じて、元気な森を育てるには人の手を入れる必要があることなどを学んでいる。 ・山に降った雨について装置を使って実験したり、揖斐川の生物を観察したりしながら森の働きや生態を学習している。

3 主な実践活動

(1) 初夏の山道散策（「創造の森」）— ジュニア森林マイスター養成講座 —

〈日 時〉 令和6年6月1日（土）9:00～11:30 揖斐川図書館（集合/解散）

〈服 装〉 長袖シャツ、長ズボン、帽子、運動靴、ナップザック、お茶、ビニール袋、タオル、軍手

〈内 容〉 揖斐川町北方地区「創造の森」を西側から「森の恵み館」「総合広場」までを散策し、周辺の樹木（落葉樹、常緑樹）の植生を観察する。

創造の森		郷土文化館	森の恵み館	総合広場
9:00 発	9:15 着	9:55 着	10:20 着	10:30
<ul style="list-style-type: none"> 7種類の葉を集める。 みはらし広場から町の遠景を観察する。 		<ul style="list-style-type: none"> 揖斐川町の民話の読み聞かせを聞く。 木の実広場で遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> 見付けたおもしろい木の葉を紹介する。 木の葉の形を調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> 周辺に自生している野草をとる。 歴史広場で休憩する。

(2) 町内の大木の幹の太さ調べ — 小学生森林マイスター養成講座 —

〈日 時〉 令和6年6月22日（土）8:00～12:00 揖斐川図書館（集合/解散）

〈内 容〉 揖斐川町内の4つの神社にある大木（杉・檜）の幹の太さを仲間と協力して測定する。

春日神社（日坂）	白山神社（小津）	北方神社（北方）	大和神社（上南方）
8:00 発	8:30 着	9:30 着	10:50 着
<ul style="list-style-type: none"> 春日神社の説明 記念樹の観察と測定、記録 	<ul style="list-style-type: none"> 白山神社の説明 太い樹木を探し周囲の長さを測定し記録 	<ul style="list-style-type: none"> 北方神社の説明 太い切株を探して木の年輪を数えて記録 	<ul style="list-style-type: none"> 大和神社の説明 太い樹木を探し周囲の長さを測定し記録

(3) 揖斐川上流での森林探検活動 — 小学生森林マイスター養成講座 —

〈日 時〉 令和6年8月9日（金）8:00～16:30 揖斐川図書館（集合/解散）

〈持ち物〉 弁当、水筒（肩掛けできるもの）、ナップザック、タオル、川流れ体験用具（水着、脱げない履物、ゴーグル、着替え、バスタオル）＊ライフジャケット（男子はライフジャケットの下にTシャツ着用）とヘルメットは貸出し。

花房山登山	丸太切り体験	川流れ体験	徳山ダム見学
8:00 発	8:50 開始	11:00 活動開始	13:00 活動開始
<ul style="list-style-type: none"> もみの木平まで、自然林、人工林を比べて、広葉樹と針葉樹の違いを見付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 3チームで3種類の丸太を切る。（タイムトライアル） 昼食後に森林講話 	<ul style="list-style-type: none"> 注意事項を確認し、ライフジャケット、ヘルメットの着用 上流で川流れ体験 	<ul style="list-style-type: none"> 15:20 活動開始 センター退所式 徳山ダム見学（資料館参観、えん堤を徒歩で渡る）



4 まとめ

- 教育委員会外部評価委員会において、本プログラムが、地域の豊かな自然に触れ、体感する活動を通して、子供たちにふるさとへの愛着と誇りを醸成する一助となっているとの評価を受けた。今後、町の施策として、木遊館サテライト会場の誘致も進められる中、木育が地域の生活・産業・文化を学ぶ機会となるよう学校教育とも連動したプログラムの改善に取り組んでいきたい。

地域学校協働活動「池田っ子チャレンジ教室」活動について ～地域講師の助力のもと、興味・関心の芽を育て自発的な学ぶ力の育成～

池田町教育委員会 社会教育課

1. はじめに

日本は少子化が進み、令和5年の日本の出生数は約72万7000人と、8年連続で過去最少を更新した。池田町も令和5年の出生数は76人と、10年前の約40%まで低下しており特に少子化が進む自治体の1つと言える。

また、出生数や子どもの人数に反比例するようにライフスタイル・子育ての手法は多様化しており、個人の特性を踏まえた暮らし方、育て方を模索していくことが求められるようになってきている。

そのように、近年子どもたちを取り巻く生育環境は複雑化し、学校教育現場に限らずそれ以外の場所においても、安心・安全な居場所を提供し、そこで自由かつ有意義に遊んだり、学んだりする機会の充実化が必要とされている。そのニーズに対応するため、当町では「池田っ子チャレンジ教室」という事業を実施している。

2. 「池田っ子チャレンジ教室」事業の概要

岐阜県では、学校・家庭・地域が連携して子どもたちを育むとともに、地域ぐるみの教育や絆づくりを通して、地域への誇りや愛着を持ち続ける心の育成を目指して「学校・家庭・地域連携協力推進事業」を行っている。

それに伴い、池田町では、子どもたちが学校以外で放課後や休日を安心して有意義に過ごすための居場所を作り、友達や家族などとの健全な遊びや体験学習等を通して、様々な分野への興味関心や好奇心の発揚、一つのことに取り組み続ける力、成功や失敗から学ぶ力の育成、また、新たな分野へ一歩を踏み出す自発性の向上を図るべく「池田っ子チャレンジ教室」を実施している。

池田っ子チャレンジ教室は、「平日コース」と「休日コース」の2つのコースがあり、「平日コース」では、平日の放課後の時間、各学校グラウンド・体育館などを活動場所に年間5回、「休日コース」では、休日・長期休暇の時期に年間約50回の教室を開催している。

教室の題材はクッキング、サイエンス、クラフト、将棋、パソコンなど計13種類があり、それぞれ地域住民の有志の方を講師として招いている。



「親子クッキングチャレンジ！」
お昼ご飯を作ろう



「キッズ・サイエンス」
スーパー水ロケットを作ろう！



「ハンドメイド・アクセサリ」
クリスマスリースを作ろう！

3. 教室参加者の特色

令和5年度の「池田っ子チャレンジ教室」参加者は143人で、中高生や未就学児を除いた小学生の参加人数は140人であった。これは、町内小学生の約10.6%にあたる。

その属性を性別と学年でそれぞれ分類すると、右記の表のようになった。参加者は男子と女子がおおよそ1:2の割合となり、参加学年の割合は、4年生が一番高くなっている。

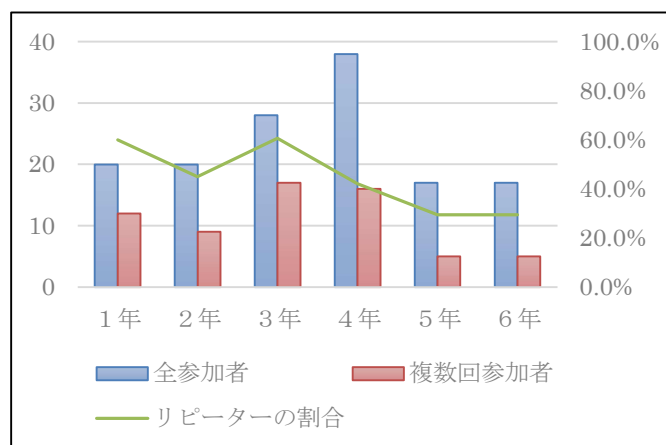
また、「池田っ子チャレンジ教室」は、放課後、休日に安全・安心して過ごせる居場所作りを目的としており、居場所作りの成果として、年間に複数回参加するリピーターの存在も重要となる。令和5年度において、年間に複数回教室に参加したリピーターの人数は143人中65人と、約45%がリピーターとなり複数回参加をしている。このことから、当事業が放課後、休日の居場所として一定の成果を挙げていると言える。

リピーターを学年別に見ると、1年生から3年生はリピーターの割合が多く、4年生から6年生は少なくなっている。割合は僅差で3年生が一番高くなっているが、1年生の中には12回、11回参加と突出して高い参加回数の子もいることから、特に1年生に対し居場所作りとして効果を発揮しているとみられる。逆に5、6年生は、3回以上参加をしたリピーターの35人中、2学年合わせて5人となっているが、これは少年団活動の本格化や学習塾への通塾など、当事業の他にもさまざまな居場所があるためとみられる。

	参加人数	割合
男子	52人	36.4%
女子	91人	63.6%

学年	参加人数	割合
1年生	20人	14.0%
2年生	20人	14.0%
3年生	28人	19.6%
4年生	38人	29.6%
5年生	17人	11.9%
6年生	17人	11.9%
その他	3人	2.1%

参加回数	人数	割合
1回	78人	54.5%
複数回	65人	45.5%



4. おわりに

子どもたちを取り巻く生育環境は複雑化し、学校教育現場以外において、安心・安全な居場所を提供し、そこで自由かつ有意義に遊んだり、学んだりする機会の充実化が求められている。

池田町でも、この「池田っ子チャレンジ教室」が、学校現場以外での放課後・休日にさまざまなジャンルの体験活動を通して遊び、学ぶことができる居場所として一定の貢献をしている。

子どもたちがこれから生きる現代は、過去より技術革新が比喩にならない速さで進み、社会を取り巻く情勢も刻一刻と変化を続けている。こうした中で必要課題と子どもたちの要求課題を見極め、地域の皆様に助力いただきながら、より興味・関心の芽を育て自発的な学ぶ力の育成を目指し、事業を実施していきたい。



ふるさと「とみか」が好きな子を育てる 地域学校協働活動

富加町教育委員会

1 はじめに

富加町は、人口約 5,860 人、4 km 四方の小さな町で、近年は転入者で人口が微増しており、少子高齢化の日本の中ではまれな町である。国史跡となった夕田茶臼山古墳や 1,300 年前の戸籍が正倉院に残されており、古くから人々の営みの続く歴史のある町である。

2020 年の学習指導要領改訂にともない、富加町においても富加小学校をコミュニティ・スクールとして、学校と地域がパートナーとなり、相互に連携・協働し、様々な活動に取り組むことにした。そこで、ふるさと「とみか」が好きな子を育てたいという願いをみんなで共有し、「ありがとう」を合言葉に地域人材や環境を活用して地域学校協働活動を行っている。

2 実践

(1) コミュニティ・スクールの組織図

共通の願いを具現化するため、右図のような組織を考えた。地域全ての人が富加小学校コミュニティ・スクールサポーター（CS サポーター）として、地域学校協働活動に加わり参加するというイメージで、今まであった活動を生かし、「安心・安全部」「学び部」の 2 部会制としている。

令和 4 年度には、全世帯にお便りを配布し、CS サポーターを広く募集した。

現在、個人の CS サポーターは 80 名、団体は約 10 団体で 60 名ほどが登録している。



図-1 組織図

(2) 具体的な取組

① 安心・安全部

CS サポーターが、毎日の登下校に付き添い、見守り活動を行っている。温かい声をかけたり、話を聞いたり、なだめすかしたりしながら、子どもに寄り添った取り組みを行っている。そして、安心・安全を支えているだけでなく、時には子供たちの学校や家庭での悩みも相談できる関係となっている。



写真-1 見守り活動

活動の区分	主な内容
安心・安全部	<ul style="list-style-type: none"> ・登下校の見守り活動、あいさつ活動 ・校庭の草刈り、草取り、花壇整備など ・校外学習の補助
学び部	<ul style="list-style-type: none"> ・教科(書写、ミシンの操作、調理実習補助、そろばんの補助、理科の実験準備・補助、版画・工作学習補助など) ・生活科、総合的な学習(農業・産業学習の指導、地域の伝統・文化の紹介、よさこい指導など) ・読み聞かせ ・CS サポーター主催の講座



図-2 活動内容

写真-2 ザリガニ釣り

② 学び部

ア. 教師が主体の授業のサポート

家庭科や書写等での技術サポートや算数の授業での練習問題の見届け、クラブ活動のアドバイス等を行い、CS サポーター自身が子供たちと一緒に楽しんでいる。

イ. 講師としての授業のサポート

総合的な学習の時間や理科、社会、生活科等に、CS サポーターが地域講師として主体的に授業を行う。昨年度は 31 回の授業を行った。

ウ. CS サポーター主催の講座

夏休みや冬休みに、公民館講座とは別に CS サポーターによる講座を行っている。

「学習広場」「手話教室」「手芸教室」「野外塾(デイキャンプ)」「編み物教室」等である。

(3) 地域学校協働活動支援員の配置

富加町では、以上のような活動をするにあたり、教育委員会に事務局員として「地域学校協働活動支援員」を置き、地域・学校・家庭・行政のパイプ役として重要な役割を果たしている。学校の教務主任が計画する時間割(授業内容)を受けて、CS サポーターと LINE グループを通して出欠を確認し、学校と連絡をとりあっている。

3 成果と課題

- ・活動に参加した若い親世代の CS サポーターが、そのよさを実感し友達等に勧めてもらえたおかげで、登録者が徐々に増えている。
- ・活動に参加した CS サポーター同士が、回を重ねるにつれ親しくなり、子供たちはもとより、互いの繋がりが深まってきている。
- ・公民館との連携がまだ深まっていないため、願いを共有しつついろいろな行事を通して、更なるつながりを図っていききたい。

4 まとめ

この活動を通して、大人はやりがいを感じ、子供たちは自分たちが大切にされていることを実感しつつ、ふるさと「とみか」を愛する心が日々育まれていると考える。これからも、学校を核として今まで以上に地域の人が強くつながる機会を作り、子供たちや地域住民がきらきらと輝ける町づくり、地域の活性化を一層図っていききたい。

コミュニティ・スクールで学校と七宗町を盛り立てる

七宗町教育委員会

1. はじめに

山間部に位置する七宗町は、人口3,194人、小・中学校児童生徒数162人で、例にもれず人口減少が進む町である。町内には2地区（神測地区と上麻生地区）があり、それぞれに小学校と中学校を配し、併せて4校が存在する。児童生徒数の減少に伴い、小学校同士・中学校同士をそれぞれ統合して、令和8年4月神測地区に小学校を置き令和7年4月上麻生地区に中学校を置く学校統合を進めている。これまで地区ごとにあったコミュニティ・スクールを全地区とすることで、七宗町全体をあげて学校を応援する体制が整う。この統合を七宗町の活性化につなげる機会と捉え推進している。

2. 事業のねらい

学校統合を進めることを通して、コミュニティ・スクールやこれまで青少年育成を担ってきた青少年育成町民会議など、子どもを取り巻く環境を総合的に見直し、子ども・地域住民・七宗町を盛り立てる取り組みとする。

3. 具体的な取り組み

(1) コミュニティ・スクールの取り組み

① 学校統合に伴う組織の見直しと活動内容

神測・上麻生それぞれにある中学校区ごとにコミュニティ・スクールを設置しているが、学校統合に伴い町内で1つにする話し合いがなされた。話し合いを進める中で、これまで取り組みが異り差もあったが、統合するにあたり現時点から共有できる取り組みを入れることと両コミュニティ・スクールのメンバーが神測・上麻生両方の行事に参加することを共通理解した。この話し合いの結果、以後に行われた上麻生小学校の行事「なかよしフェスティバル」では、神測・上麻生の方々の協力が得られ、多彩なブースを設けて子ども達を盛り立てることができた。

② 活動内容の例

㊦ 上麻生小学校「なかよしフェスティバル」

地域の方々70名が用意した12のブースを異学年縦割りグループ「なかよし班」で体験した。和太鼓や高所作業車体験、ロボット操作、七宗町に関するクイズなど地域の方々だから用意できるものばかりで、児童は「七宗のことが勉強できるクイズや工作、スポーツなどいろいろあって面白い」と感想を述べた。また、



「なかよしフェスティバル」

参加していただいた地域の方々からは、「“七宗かるた”を使い七宗全体を話題に子どもと話ができることが良かった」と意見をいただいた。

①神淵・上麻生中学校閉校行事の運営

長年にわたって子どもたちが通学してきた中学校であり地域に支えていただいた学校の閉校を迎えるにあたり、コミュニティ・スクールからの申し出により閉校式典後の記念行事を行うことが決定した。月に一度の打ち合わせ会や準備作業など熱心に行われているが、思いに賛同する方々が回を追うごとに増え企画内容も充実したものになってきている。自治会での話題にも上がり盛り上がり地域との勢いに繋がっていると感じさせる。

(2)青少年育成町民会議の取り組み

①組織の見直し

32地区ある自治会から各地区1名の地区推進員を選出する方法を長年とってきたが、人口減により役員選出が難しくなったことで組織と活動内容の見直しが必要となった。そこで、地区推進員を廃止すると共に家庭部会や青少年部会などの部会をなくし、青少年育成推進指導員が全体の活動を統括する形とした。活動に当たっては、青少年育成町民会議運営委員会メンバーで担当することとし、関係団体と連携協力して地域の総力で取り組むものとした。



「チャレンジランキング」

②活動内容の精選と各種組織との連携

町民を対象とした青少年育成研修会を廃止してはどうかという意見や子ども会・スポーツ少年団と協力した行事を位置付けてはどうかという発案などを参考に、事業の見直しと町内組織の連携で効果的に青少年を育成する取り組みを進める。

(3)子ども会の取り組み

①組織の見直し

これまで30ある単位子ども会も子どもがいない地区が増え、役員を出すことや活動への協力が難しくなってきた。更に子ども会育成会指導員さんも高齢化されたことで活動を維持することが難しくなった。そこで、子ども会の保護者から役員を組織し、青少年育成町民会議と協力して行事を企画運営することとした。



子ども会「お楽しみ映画会」の様子

②活動内容

㊦子ども会「お楽しみ映画会」

今年度は保護者の実行委員会で「お楽しみ映画会」を企画・実施した。町全体で子どもが集い楽しみな映画の鑑賞とゲーム大会が行われ大変盛り上がった。

4. 成果

コミュニティ・スクールが全町に拡大したことで、全町民を巻き込み活力を生むことに繋がった。

読書のまち「しらかわ」 読書活動の充実に向けて

～読書フェスティバルの取組を通して～

白川町教育委員会



1 令和6年度 白川町読書教育の方針と重点

読書活動の充実に努め、豊かな感性・倫理観・幅広い思考力を培う

白川町では、各校における図書館運営によって、「読書に親しむこと」を目的とした指導が充実しており、各活動の意義について児童生徒だけでなく教員にも浸透しているといえる。また、児童生徒が主体的に図書館運営に携わり、図書館祭りといった特別な活動だけでなく、日常的に読書啓発活動に取り組んだり、子どもたち自身が読み聞かせを行ったりしている。これは、学校だけでなく町立図書館（以下、楽集館という）の司書や職員との連携による成果であるともいえる。一方で、学校内では読書に親しむ風土が醸成されているが、特にコロナ禍以降、学校外における読書活動に対しての意識の低さについては課題が残る。家庭への啓発だけでなく、町をあげての継続的な取組も必要であると考えます。

2 町の読書活動（学校外の取組）におけるこれまでの歩み

白川町では、学校外の読書活動については、コロナ禍前後における取組は下記のとおりである。

	活動の様子	活動内容	○成果と▲課題
R1 元までの 取組	読書サミット 	令和元年8月1日(木)←第9回 13:30～16:30 町民会館大研修室 ① 朗読劇(町内有志) ② 我が校図書館自慢 ③ ビブリオトーク ④ フリートーク	○多くの児童生徒が参加するため、活気がある。 ○地域の方は子どもの頑張りを微笑ましく思っている。 ▲内容が多岐にわたるため、教師の負担が大きい。
R2、3、4年度はコロナウイルス感染症対策のため、「読書サミット」を開催しなかった。			
5R 年度年	読書フェスティバル 	令和5年12月9日(土) 10:00～12:00 楽集館2階 ① 楽集館、読み聞かせ ② 落語&講演会 ③ おすすめ本コンクール表彰式 ④ フリートーク	○教育委員会主導で進めることで、できる限り、学校(教員)負担のかからないようにした。 ▲家庭までに読書活動の充実に図ることができなかった。

コロナ禍前の令和元年度までの取組は、大変充実したものとなっていた反面、当時の活動記録を読み返してみると、「児童生徒が『読書に親しんでいる』割合はまだ低い。やらされている読書から自ら進んで読書となるよう、本に親しむ時間・場所を確保するとともに、読書の意義について考えさせたり、意識を高めたりするなどの取組を考えていく。」という振り返りがなされるなど、主体性に弱さを感じる。さらに、この活動を実施するためには、教員は発表準備、教育委員会は関係機関（教育事務所、楽集館、地区公民館等）や各校との連絡調整、スクールバスにかかわる業務（搭乗確認や運航）の負担が非常にかかる現状があり、働き方改革の視点や継続的に取り組めるのかの視点から不安があるものであった。

令和5年度には、これまでの経緯を振り返り、新たに「読書フェスティバル」という名称に変え、内容も運営も新しく組み立てた。

3 これまでの取組を踏まえた令和6年度取組

令和6年度は、これまでの取組のよさを踏まえた上で、現状の白川町の実態（教師の負担軽減、児童生徒の日常の読書活動の充実等）に合ったものになるよう以下のように考えた。

【午前】

- ・「読書にかかわるいろいろな賞⁽¹⁾」の表彰式
- ・ビブリオトーク&フリートーク⁽²⁾

【昼休み】演奏会（本の読み聞かせを含む）

【午後】読み聞かせ講演会

- ・絵本作家のワークショップ



【作品展示の様子】



【会場内の様子】



【表彰された児童生徒】



【演奏と読み聞かせ】



【絵本作家によるワークショップ】

【工夫点】

- (1) 「読書にかかわるいろいろな賞」については、国語の教科書に掲載されている図書館と連携（関連）した学習内容での作品をそのまま応募作品とした。8割以上の児童生徒から作品応募があった。入賞作品については、当日の展示（楽集館）だけでなく、ふるさと祭り（町民会館）等でも展示した。
- (2) 本が好きな子同士が交流できる場「ビブリオトーク&フリートーク」を実施し、同世代の仲間の思いや考えに触れることができるようにした。



4 令和6年度読書フェスティバルの参観者の感想

- ・学校でも自分から本を読む人が少ないと思うので、このような活動を続けてほしいと思いました。（小中学生多数）
- ・今回初めての参加でしたが楽しかったです。子どもがもっと本好きになってくれると嬉しいです。（保護者）
- ・たくさんの子どもが表彰してもらえてよかったですと思います。白川町は読書活動に力を入れていると思うので、このような活動はとても良いと思いました。（保護者）
- ・本が好きで、小さい時から身近に本がある生活ができていて、小学校でも毎日本を借りてこれ、親しみをもっているのがありがたいです。（保護者）
- ・こんなに多くの子どもたちが受賞されて、嬉しい思いをされたことと思います。こういう機会をきっかけに、本に触れる子もいると思うので、きっかけは大切だと思います。（学校・保育園関係）

5 令和7年度に向けて

来年度は、本年度の実践に加え、白川町では今後の学校統合問題等も踏まえ、より活動が充実するように、「小中学生による読み聞かせ」「図書館の廃棄本の無料配付」の活動を行ったり、児童生徒のアイデアを活かしたりすることで、今まで以上に、興味関心を高め、豊かな感性・倫理観・幅広い思考力を育てることができるような「読書フェスティバル」になるようにしていきたいと考える。

「学力向上推進事業」について

1 はじめに

御嵩町では、平成14年度に教頭会を基盤とした学力向上推進委員会を設置し、児童生徒の学力の向上に取り組んできた。平成19年度からは「全体の学力の一層の向上」をテーマとした取組をスタートさせ、平成22年度には「学力向上推進事業」と名称を変更し、取り組む内容を下記の4観点からより明確にして実践交流や研究協議を積み重ねてきた。

「学校」・・・主に授業改善

「校種連携」・・・主に幼保小中高を見通した教育

「家庭・地域連携」・・・学校運営協議会の推進
地域学校協働活動の充実

「児童生徒」・・・自治活動の推進

特に「校種連携」では、中学校区ごとに小中交流会を年3回実施し、充実した連携を構築してきた。しかし一方で、児童生徒が主体的に学習に関わっていく姿や継続して取り組む姿に弱さが見られたため、平成25年度より、秋の小中交流会を「拡大交流会」とし、中学校区の交流会を持ち回りとして、町内の全職員及び町外や高等学校からの参加者も含めて交流の和を広げ、実践内容の共通理解を図ってきた。

2 校種連携の主な取組

御嵩町では、小中交流の枠を超えた校種間での連携にも力を入れている。今年度は、町内の東濃実業高等学校と東濃高等学校の生徒との交流を幅広く行ってきた。具体的な実践事例には次のようなものがある。

- ・小学校低学年を対象とした、生活科における水遊び学習の指導とサポート(※図1)

- ・小学校高学年を対象とした、家庭科の調理実習における指導とサポート
- ・中学生を対象とした、家庭科のミシン指導
- ・中学校の英語科での学習を対象とした、外国語を母国語とする生徒との交流学习

各月に行われる校長会において、年に2回、高等学校の校長も参加し、各校種における実践事例を交流する機会を設けたり、指導主事が校種間交流の場に足を運び、児童生徒の活動の様子を小中学校に情報提供したりすることで、小中学校から高等学校への生徒交流の依頼が増えてきている。現在は、町内のすべての小中学校が、高等学校との連携を行っている。

こうした取組によって、地元の高等学校に興味、関心を寄せる児童生徒が増えたり、中学卒業後に進学したいという思いをもつ児童生徒が増えたりしており、校種間での連携の良さを実感している。



図1 自校の授業で作成したおもちゃの使い方を説明する高校生の様子

3 学校運営協議会による特色ある学校づくりのサポート

町内の小中学校は、すべての学校に「学校運営協議会」が設置されている。運営協議会の委員には、学識経験者をはじめ、町議会議員、社会教育委員、公民館長、保育園長、主任児童委員、校区の学校職員など、様々な立場の方がみえる。それぞれの委員が、子どもたちのために何ができるのかを考え、多様な場面で学校の教育活動に参画し、地域学校協働活動の充実にもつながっている。

例として、次のような特色ある活動を行っている。

- ・地域講師を招く授業の企画立案や連絡調整
- ・農家の方を指導者とした農作業体験学習の支援
(※図2)
- ・家庭科の調理実習や裁縫での学習支援
- ・朝の挨拶運動

こうした活動は、学校運営協議会の方々的人的資源を活用して行っており、新たな取組へと発展してきている。教育委員会においては、各校の運営協議会の委員長と副委員長を一堂に招き、実践交流の場として、「学校間交流会」を位置付けており、その場での意見交流が、活動の広がりにもつながっている。

また、児童生徒は、地域の方々との交流を機に、地域への関心が高まり、地域行事等に積極的に参加したりボランティアとして活躍したりするなど、地域の一員としての自覚をより強くもてるようになってきている。



図2 地域の方を指導者としたさつまいもの苗植え活動

4 教職員の授業力向上に向けて

令和6年度、御嵩町内の小学校においては、通常学級に在籍しているが、通級指導教室での指導を必要とする児童の割合が13%であるという実態がある。これは全国の8.8%よりも高く、子どもたちに対してよりきめ細かい指導が必要であると捉えている。このような実態と、全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、教育委員会では、各種訪問時に参観した授業での指導の様子から、成果と課題を明確にし、現場で教職員の指導に必要であるポイントについて精査し、「御嵩町学力向上推進 指導のポイント6点」(※図3)を作成し、学校に発信することで、教職員の指導力向上に努めている。



図3 授業での指導のポイント

また、各月に行われる教頭会に「学力向上推進委員会(年に5回実施)」を位置付け、学力向上推進事業における4つの観点について、各校の実践の成果や課題について交流している。4つの観点以外にも、年に3回実施している小中交流会の進捗状況を確認したり、ICTや情報教育の実践交流、家庭学習の在り方などを交流したりすることで、町全体で成果や課題を共有し、各学校の指導に生かすことができるよう努めている。

こうした取組を通して、学力向上推進事業のローガンである、

「楽しいな 分かったよ できたよ」

を、子どもたちが実感し、笑顔があふれる御嵩町を目指している。